

研究報告

入学2ヵ月後の看護系大学入学生の学校環境への適応 — 総合大学と単科大学の比較 —

近藤 裕子, 國重 絵美

徳島大学医学部保健学科

要旨 入学2ヵ月後の看護系総合大学と単科大学の新入看護学生に対して、学校環境への適応レベルを比較し、その差を明らかにして、学生への関わり方を検討する基礎資料とするために、選択一部記述式の調査を実施した。その結果、総合大学と単科大学の新入生とでは、入学後の学校環境への適応レベルにおいて、学校の雰囲気や授業（授業）、通学時間との関係において差が見られた。この要因には、総合大学と単科大学の立地の違いや、課外活動やアルバイトの有無が考えられた。また、教員との関係においては両大学とも、他の項目に比較して適応レベルの値が低い傾向を示した。今後、教員は学生との関係を、入学後早い時期に築くことができるよう努めることが重要である。また、大学の違いに留意しながら、学生が学校環境に適応できるよう支援を考える必要がある。

キーワード：看護学生、入学2ヵ月後、学校環境、適応

はじめに

4月に看護系大学に入学した看護学生にとって、家族から離れた日常生活や学校生活、新たな環境での人間関係の構築の必要性など、大学入学に伴う環境の変化は大きい。学生は、入学時点で行われるオリエンテーション、授業ガイダンス、サークルへの入部などの行事で、周囲を見渡す時間もなく1ヵ月が経過し、5月の連休を迎える。その後、本格的な大学での授業や生活が開始となるが、このころより学生は、新たな環境へ真摯に対峙しなければならず、多様なストレスへの対処を余儀なくされる。

看護学生のストレス・コーピングに対する先行研究としては、臨地実習におけるストレス¹⁻⁵⁾や、学校環境のストレスとそれに対するコーピング⁶⁻⁸⁾、ソーシャルサポートとの関連⁹⁻¹⁵⁾などがある。本論に関連する文献に

は、看護基礎教育課程（大学・短大・専門学校）の新入生を対象に、学生の不安状態や適応状態を尺度を用いて入学1ヵ月後の5月に調査を行い、「学生は高い不安状態にあり、自己概念、対人関係、学習などに諸問題を生じる危険性のある低い適応状態」と結論づけていた¹⁰⁻¹²⁾。

筆者は、同年度に総合大学と単科大学とで授業を担当する機会をもった。その中で学生の授業に対する取り組みや授業への参加程度が、両大学で異なる状況を体験した。その状況から、学校への適応レベルに差があるのではないかと考えた。新入生が積極的に授業に参加でき、学生生活を送る環境をつくるには学校組織はもとより、教員の学生への関わり方などの検討も必要であり、その基礎資料を得るために両大学の学生の学校環境への適応を検討した。

目 的

看護系大学に入学して2ヵ月経過した看護学生の学校環境への適応レベルの差を明らかにし、学生への関わり方を検討する基礎資料とする。

2005年3月1日受理

別刷請求先：近藤裕子，〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部保健学科

方 法

結 果

1. 対象

A 総合大学（以下 A 大学と略す）と B 単科大学（以下 B 大学と略す）に設置されている看護学科に、2002 年 4 月に入学した看護学生 130 名である。学生の内訳は、A 大学学生 70 名と B 大学学生 60 名である。

A・B 両大学とも、地方の県庁所在地に隣接する地域にある大学である。A 大学は 5 学部、2 キャンパスを有する総合大学であり、キャンパス間は自転車で約 30 分の時間がかかる。1 年次の学生は主に共通教育が行われるキャンパスで学習しているが、週一回だけ専門教育を受けるためもう一つのキャンパスに通学している。B 大学は、1 学部 1 キャンパスを有する単科大学である。

2. 方法

対象の学生に①入学前と入学後の生活サイクルや生活スタイルの変化の程度、②学校生活への適応レベル、③ストレスの程度とストレス源、④人的サポート源と人数などについての選択・一部記述式の質問紙を作成し、2002 年 6 月に調査を実施した。選択式の項目は、全く変化ない（全く感じない）を 1 とし、大きく変化した（非常に強く感じる）を 5 とする 5 段階尺度とした。学校への適応レベルについては、適応しているを 10、不適応を 0 とし、自分の適応レベルを数字で記述してもらった。サポート源については人数、自分との関係、サポートの種類についてである。

学生には調査の趣旨について説明後、調査紙を配布し、1 週間留置後に、設置した回収箱に投函するように依頼した。調査に協力の得られた人数は、A 大学 46 名 (65.7%)、B 大学 42 名 (70%) の合計 88 人 (67.7%) であった。これら 88 名の調査紙の内容を、選択式項目に関しては単純・クロス集計を行い、学校への適応レベルは学校別で t 検定を行った。自由記述の項目に関しては、学生の記述内容を抽出した。

3. 倫理的配慮

両大学の学生に調査の趣旨と、自由参加であること、無記名であり個人特定はできないこと、プライバシーは十分配慮すること、結果を公表することについて説明し、了解を得た。

入学後の生活サイクルや生活スタイルの変化について全学生は、「大きく変化した」と 34 名 (38.6%) が回答し、「変化した」は 36 名 (40.9%)、「どちらともいえない」は 8 名 (9.1%)、「あまり変化しなかった」とする者は 10 名 (11.4%) であった。これを大学別にみると、「大きく変化した」は A 大学では 15 名 (32.6%)、B 大学では 19 名 (45.2%) が回答し、「変化した」は 20 名 (43.5%) と 16 名 (38.1%)、「どちらともいえない」は 5 名 (10.9%) と 3 名 (7.1%)、「あまり変化しなかった」とする者は 6 名 (13.0%) と 4 名 (9.5%) であった。

学生が記述した変化の内容を表 1 に示した。記述が多かった項目として住環境では、一人暮らしを始めたこと、活動面ではサークル活動を活発に行い出したこと、学習に関しては高校時代と異なり殆ど勉強しなくなったこと、食生活では、偏った食生活や食事時間が不規則となったこと、外食が多くなったことを、人間関係では新たな友達が増加し、幅が広がったこと、睡眠時間では不規則になったことなどであった。アルバイトに関しては、A 大学の 20 名がアルバイトを始めたことと記述しているのに対して、B 大学では 5 名であった。

学校環境への適応レベルとして、学校の雰囲気、友人との関係、教員との関係、学業（授業）、通学時間などを表 2 に示した。すべての項目において、A 大学より B 大学の学生の適応レベルが高い。B 大学では学校の雰囲気、友人との関係、通学時間などが 7 以上であるのに対し、A 大学の学生は、友人との関係においてのみ 7 以上と答えていた。A 大学の学生には、通学時間が 40 分かかり、学校の近くに下宿したい希望や、電車通学のため通学時間の制限があることなどの記述があった。教員との関係においても B 大学が 5.4 であるのに対し A 大学では 4.6 であり、学業に関しても前者が 6.1、後者は 5.2 であった。A 大学と B 大学との間で t 検定を行った結果、学校の雰囲気 ($p < 0.05$)、学業 ($p < 0.05$)、通学 ($p < 0.01$) の項目に有意差がみられた。

現在のストレスの程度を全学生でみると、「全く感じない」との回答は 5 名 (5.7%)、「時々感じる」は 62 名 (70.5%)、「どちらともいえない」は 8 名 (9.0%)、「強く感じている」は 8 名 (9.1%)、「非常に強く感じている」と回答した学生は 5 名 (5.7%) であった (図 1)。ストレスの程度を学校別でみると、「全く感じない」は A 大学では 2 名 (4.3%)、B 大学では 3 名 (7.1%) が回答

し、「時々感じる」は32名(69.6%)と30名(71.4%),「どちらともいえない」は5名(10.9%)と3名(7.1%),「強く感じている」とする者は3名(6.5%)と5名(11.9%),「非常に強く感じている」者は4名(8.7%)と1名(2.4%)であった。強く感じていると回答した学生のストレスには人間関係があげられ、ついで学校であった。

学生の人的サポート数を図2に示した。A大学では5名が最も多く、次いで3名と10名以上、4名の順であっ

た。他方、B大学では3名、1名と5名、4名となっていた。サポート源との関係には両大学とも両親が最も多くあげられており、次いで友人であった。これらの人々からのサポートの種類には、両親からは金銭面や精神面のサポートを、友人からは精神面のサポートを受けていた。

表1 A・B大学学生が記述した環境の変化の内容

項目	A 大学 n=46	B 大学 n=42
	内 容	内 容
住 環 境	一人暮らしになった(16) 管理を全部しないといけない(4) 部屋が狭くなった(3)	一人暮らしになった(16) 管理を自分がしなくてはいけない(2) 姉と二人暮らし(1) 部屋が狭くなった(1) 場所が変わった(1) 掃除に気を配るようになった(1) 遅くなると友達の家に泊まる(1) 明かりがついていない(1)
食 生 活	食事に偏りがある(10) 時間が不規則になった(8) 自炊をしている(6) 外食が多くなった(4) 野菜不足(4) 魚をほとんど食べない(2) 肉類・揚げ物を食べない(1) 出来合の物ですます(1)	時間が不規則となった(8) 外食が多くなった(7) 食べないことが多い(5) 食事に偏りがある(4) 自炊をしている(2) 単調になった(2) 朝食を欠食する(2) 間食をしなくなった(1) 疲れてあまり食べられなくなった(1)
活 動	サークル活動が忙しい(13) 自由に使える時間が増えた(4) 積極的に活動するようになった(2) 活動しなくなった(2) 通学に40分かかり、疲れる(1) 電車通学で時間が制限される(1) 自転車・徒歩での移動が多い(1) 行動範囲が広がった(1) 遊び中心となった(1)	サークル活動を活発にしている(8) 夜遅くまで遊ぶようになった(5) 外出が増えた(3) 自由に使える時間が増えた(2) サークルが疲れる(2) 朝と夜が逆転の生活となった(1) 自由な時間が少なくなった(1) 帰宅が遅くなった(1) あまり活動しなくなった(1) 自転車通学となった(1) 活動が精神的支援になっている(1) 自動車学校に通い出した(1)
学 習	勉強をしなくなった(16) 勉強をよくするようになった(2) 勉強に集中できなくなった(1) 新しい分野を聞いて混乱している(1) 難しい(1) 早く専門科目を受けたい(1) 授業とサークルの間を有効に使っている(1) 専門的な内容を学べてうれしい(1) 90分授業で疲れる(1) レポート・宿題・予習でついでいくのが精一杯(1)	勉強をしなくなった(16) 難しい(4) 専門的になった(2) 想像と現実のギャップが大きい(1) 日によって授業時間が違う(1) しんどい(1) 大変忙しい(1) 高校時代と内容・方法が違う(1) 自主的にしなければいけないので、なかなか進まない(1)

項目	A 大学 n=46	B 大学 n=42
	内 容	内 容
人 間 関 係	つきあいの幅がひろがり、たくさん の友達ができ(22) 全く知らない人ばかりで、なかなか なじめない(2) 男友達ができ(1) 複雑になった(1) 高校での友がほとんど県外にいつ た(1) 人と話さない(1)	幅広い年齢の人とのつきあいとなり、 幅が広がった(10) サークルで友達が増えた(5) 高校時代の友達と離れてさびしい (2) 周囲は女性ばかりになった(1) 理解しあえる友人ができ(1) 目上の人に挨拶・礼儀などで気を使 う(1) 家族との会話が減り、メールでの 対話となった(1) 友達と過ごす時間が多くなった(1)
睡 眠 時 間	少なくなった(6) 不規則になった(5) 就寝時間が遅くなった(2) よく眠るようになった(2) 長時間眠るようになった(2) 寝不足(1) 規則正しくなった(1) 朝起こされるようになった(1) 朝起こしてくれる人がいないので 早く寝るようになった(1) 薬を飲まないと寝られない(1)	少なくなった(14) 不規則になった(5) 起床時間が遅くなった(1) 長くなった(1) ベッドで寝るようになった(1) 朝起こしてくれる人がいない(1) 朝起きられなくなった(1) 寝るのも起きるのも遅くなった(1)
ア ル バ イ ト	アルバイトを始めた(20) 遅くまでアルバイトをしている(3) アルバイトを探している(2) よい経験をしている(1) 精神的疲労も大きいが充実感もも てるようになった(1)	アルバイトを始めた(5)

表2 学校別学校生活への適応レベル

項 目	A 大学 n=46	B 大学 n=42	p 値 Welch の検定
学校の雰囲気	6.522(1.906)	7.333(1.603)	0.014*
友人との関係	7.043(2.458)	7.762(1.885)	0.109
教員との関係	4.609(1.879)	5.405(2.061)	0.092
学業(授業)	5.195(1.833)	6.143(1.855)	0.047*
通学時間	6.022(3.102)	7.381(3.208)	0.004**

*p<0.05 **p<0.01

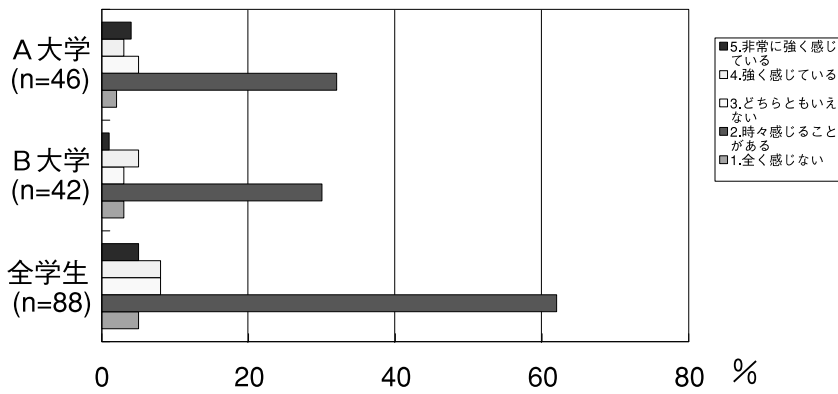


図1 学校別学生のストレスの程度

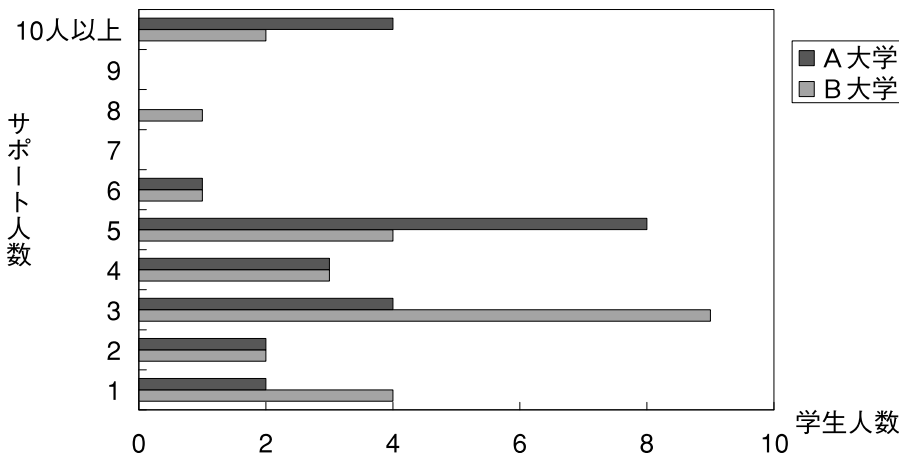


図2 学校別サポート人数

考 察

地方大学に入学する学生は、地元よりも県外者が多い。どちらの学生にとっても希望に満ちて入学した環境からさまざまなストレスを受けることとなる。学生には、親元を離れての一人住まいや、新たに築く人間関係などがストレスとして働く。

入学後の学生は、新たな環境に適応しようと努力しながら、学校や日常生活を送っている状況が見られる。学生が一人暮らしを始めることにより、生活リズムの変化や、不規則な食生活が指摘されている^{16,17)}。2000年度から始められた第3次の国民健康づくり対策とした「21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）」では、朝食の摂取を推奨している。しかし若者が朝食を欠食する割合は高く¹⁶⁾、今後の健康状態が危惧されている。

今回の結果からも、変化したとして記述されていた内容は、両校とも住居や食生活、学習に関することである。県外からの入学生は、学校の近隣で下宿し一人暮らしを始めている。それが食生活を変化させる要因となってい

る。学生の自炊の状態からは、料理のレパートリーが少なく単調であり、毎日同じ物を摂取している、魚や肉類の蛋白質や野菜の摂取がほとんどないか少ない、疲労が強い場合にはレトルト食品ですませている、などの記述から、食生活の変化をうかがうことができる。さらにサークル活動を行うことで、夕食時間が不規則となっている。A・B大学の学生とも、バランスのよい食生活を送っていると言えない状態である。さらに、朝食を欠食する学生の割合は、A大学よりもB大学が多く、学生は規則正しい食生活を送っていない。

次に学生の学習状況の記述をみると、学習時間の減少や学習を全くしなくなったとの回答が多い。学生は、入学前までは大学進学という目標の

もとに、勉学に励んでいたと想像できる。しかし、大学入学後は、一般に言われているように「大学は遊ぶところ」と認識しているのか、学習以外の課外活動やアルバイトに精出している。これら課外活動やアルバイトが、学習をしない要因となっている。しかし、B大学の学生の中にはアルバイトを行っている者は5名であるが、課外活動に熱中しているのか、A大学同様学習しなくなったと回答している。その他に専門科目が難しい、学習方法が今までと違う、ついていくのが大変などと記述している学生がおり、教育方法の改善や学習方法に対する助言が必要と考える。そして学生の学習へのモチベーションが向上できるよう、課外活動やアルバイトへの時間やエネルギー配分について指導できる体制の整備が必要であろう。

アルバイトや課外活動時間の増加は、上述した学習ばかりでなく、学生の睡眠時間とも関連している。学生は睡眠時間の減少や不規則さを認知している。大学の授業開始時間は一定でなく、朝寝の状態や夜遅くまでのアルバイト・課外活動により就寝時間が遅く、昼夜逆転とい

う学生もみられ、学生の生活時間は相当不規則である。生活の不規則さには、一人暮らしで誰にも拘束されなくなった自由さも影響している。

次に学生の人間関係をみると、課外活動を活発に行うことにより、人間関係は拡大している。学生はサークルへの参加により、その中で新たな先輩後輩の関係を築きながら、人間関係の幅を広める努力を行っている。他方、なかなか新たな関係を築くことが難しいと感じている学生も存在し、それが強いストレスとなっている。

学生の学校生活への適応レベルは、大方の学生が10のうちの7～6の段階であることからみると、学生の学校生活への適応は比較的よいと判断できる。学校の雰囲気や、友人との関係に関してはA大学7.04に対し、B大学は7.76と高く、友人関係は良好に発展している。A大学ではサークルを通じて多くの友人関係を構築しているのに対して、B大学では看護を学習する中での関係と思われ、小さい集団の中で友人関係を築いている。一方教員との関係においては、A大学では4.61、B大学では5.41と、他の項目に比較して低い値である。A・B大学とも学生と教員との関係は、学生間との関係ほど親密でないと考えられる。これは、入学時より同キャンパスで看護を指向する学生が学校生活を送るB大学と、2つのキャンパスを往来し、多様な専攻の学生と接触し、専門のキャンパスには週一回だけしか来ないA大学との違いによるものと考えられる。しかし、入学2ヵ月後では教員との関係を築くには、教員と接触する機会も時間も十分と言えないようである。

先行研究から、1年次のストレスサーとして人間関係や学習関係があげられている¹⁰⁻¹²⁾。本調査においても学業への適応のレベルはA大学5.195、B大学は6.143であり、A大学の学生はB大学の学生よりも適応レベルが有意に低い。上述したように課外活動やアルバイトに興味を持つ学生が多くいることと、学習をしなくなったこととも関連していると考えられる。学業への適応の低さからは、難しい、分からないという状態から、授業への関心が低下する危険性を含んでおり、個々の学生に対してきめ細かい関心を注ぐ必要がある。

通学時間に関しても、同一キャンパスの近隣に起居している学生が多いB大学と、2つのキャンパスのどちらかに起居しているA大学とでは、通学時間にも差が生じている。両大学とも1/3以上の者が自宅通学者であるが、通学に公共機関が活用でき遠距離通学が可能であるA大学では、B大学に比べて通学に時間がかかっ

ている。そのため、遠距離通学の学生の負担も大きい。

以上より、学生の学校への適応レベルに関して、学校の雰囲気や学業、通学時間などに学校差がみられた。A・B大学の新生入学生の変化として一人暮らしになったこと、そのために食生活や睡眠時間に変化が生じ、不規則な生活となっている。さらに課外活動や、新たに始めたアルバイトなどが、学習時間にも影響を及ぼしていると考えられ、新生入学生に対しては、大学の違いに留意しながら、学生が学校環境に適応できるよう支援を考える必要がある。

結 論

A・B大学の新生入学生の学校への適応レベルの調査から、大方の学生は、入学後の学校環境へ適応している。しかし、学生は学校の雰囲気や学業、通学時間に対して両大学で差が認められた。これは総合大学と単科大学の違いや、課外活動やアルバイトの有無などが影響していると考えられた。さらに友人関係に比べ、教員との関係において両大学とも、他の項目に比較して適応レベルの値が低い傾向を示した。今後、教員は学生との関わりにおいて、学生と教員との関係が入学後早い時期に築けるように努めることが重要である。また、大学の違いに留意しながら、学生が学校環境に適応できるよう支援を考える必要がある。

文 献

- 1) 正村啓子, 岩本美江子, 市原清志 他: 臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因の検討, 山口医学, 52(1~2), 13-21, 2003.
- 2) 田村千代美, 谷原政江, 砂田正子 他: 学生の自我の発達と小児看護実習におけるストレスおよびその対処行動との関連, 第27回日本看護学会集録看護教育分科会, 94-97, 1996.
- 3) 奥村亮子, 青山みどり, 廣瀬現代美 他: 成人看護学実習における学生のストレスと自己効力感との関連性の検討, 日本看護学会論文集第32回看護教育, 203-205, 2001.
- 4) 檜野良子, 津田彰, 命婦恭子: 看護学生の社会的スキルと臨床実習におけるストレスとの関係, 日本看護学会論文集第32回看護教育, 200-202, 2001.

- 5) 奥村亮子, 青山みどり, 廣瀬規代美 他: 成人看護学実習における学生のストレス・コーピングの縦断的検討, 群馬県立医療短期大学紀要, 9, 49-56, 2002.
- 6) 荒木節子, 新谷恵子, 高間静子: 看護学生の背景の違いによる日常生活におけるセルフケア度の比較, 富山医科薬科大学看護学会誌, 3, 111-121, 2000.
- 7) 甘佐京子, 藤田きみえ, 牧野耕次: 看護学生の学校適応と心理的特徴—社会人経験を持つ看護学生を対象として—, 滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌, 6, 57-63, 2002.
- 8) 甘佐京子: 看護学生の学校適応と自尊感情との関連, 滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌, 6, 49-55, 2002.
- 9) 市丸訓子, 山本富士江, 野田淳: 看護大学生のストレス度とストレスラー・ストレス反応・影響因子との関連—4年間の縦断的研究—, 東京保健科学学会誌, 4(2), 77-82, 2001.
- 10) 大森美津子, 田村由美, 高木永子: 看護基礎教育機関の新入学生のストレスラーに対するコーピング, 香川医科大学看護学雑誌, 1(1), 35-45, 1997.
- 11) 高木永子, 大森美津子, 田村由美: 看護基礎教育機関の女子新入生の適応状態とその特徴, 香川医科大学看護学雑誌, 1(1), 10-20, 1997.
- 12) 高木永子, 田村由美, 大森美津子: 看護基礎教育機関の新入女子学生の適応状態を左右するストレスラー, 香川医科大学看護学雑誌, 1(1), 21-34, 1997.
- 13) 丹波さよ子: 臨床実習における看護学生に対するソーシャルサポートとストレスとの関係, 看護展望, 25(3), 380-387, 2000.
- 14) 花田直子: 大学生の同性友人間における援助の互惠性と抑うつ要因についての研究, 聖マリアンナ医学研究誌, 3, 17-23, 2003.
- 15) 西村良二: 大学生のストレスを緩和するソーシャルサポートの機序についての検討, 広島医学, 51(9), 1097-1101, 1998.
- 16) 岩本真紀: 看護学生の健康的なライフスタイルを促進する要因に関する研究, 2001年度香川医科大学医学系研究科看護学専攻修士論文.
- 17) 篠原智恵美, 佐野富子, 中川利津代 他: 20代の女性の食生活の現状と問題点について, 四国公衆衛生雑誌, 44(1), 32-35, 1999.

*Nursing students' adaptation to school during the first two months after entrance
: comparing multidivision universities and single-focus colleges*

Hiroko Kondo, and Emi Kunishige

Major of Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

Abstract A questionnaire survey (using some questions in the alternative choice format and some open-ended questions) was given to nursing students who had entered their program (at either multi-division universities or single-focus colleges) two months before. The purpose of the survey was to investigate the students' degree of adaptation to their program and explore differences between multi-division and single-focus institutions, with the ultimate goal of collecting basic data useful for improving our teaching techniques. The survey revealed differences in level of adaptation to attending school between those attending multiple-division and single-focus institutions. These differences were associated with the atmosphere in the school, the lessons and lectures provided within the program, and the time it took the students to reach school from home. These factors seem to represent differences in location, the after-school activities pursued by the students and the percentage of students with paid jobs between the two types of institution. For both types, the degree of adaptation tended to be less in terms of the students' relationships with teachers than in terms of the other factors. This seems to indicate that teachers should begin making efforts to build firm relationships with their students as soon as the students enter the school. The results also suggest that teachers and other staff members should help students in their adaptation to the school environment, and that they should take into account specifics of the type and features of the given institution.

Key words : nursing students, two months after entrance, school environment, adaptation